

# “Utopia” における Thomas More の世界

野 村 博

## 1 は じ め に

「Utopia と utopian という二語よりも意義の曖昧な語が英語にあるかどうかは疑わしい。この二語は、外延（明示的意味）においても内包（言外の意味）においても、ともに定義をほとんど許さない自由な用語法を獲得してきた。」<sup>(1)</sup>といわれる。

たしかに utopia という語は、Thomas More の創作にかかる語として、もともと最善の政体が行なわれている理想または虚構の島 UTOPIA という固有名詞であったものが、その後広く一般的に空想や夢に代わる普通名詞として利用され、さらには Friedrich Engels によって Wissenschaft に対比する語として、また Karl Mannheim によって Ideologie に対比する語として、それぞれ学術用語にまで昇華されるなど、今日ではきわめて多義的に使用されてきているのである。

しかし utopia という語が、no place, nowhere を意味するギリシヤ語 οὐτοπος から由来した語であることは、周知のとおりである。だがさらに utopia という語は、Roger L. Emerson も指摘しているように、good place<sup>(2)</sup> を意味するギリシヤ語 εὐτοπος にも起源を有していると考えられる。

なるほど The Oxford English Dictionary でも utopia の語源については、οὐτοπος にもか言及されていないが、しかし語義としては、「1. 完全な社会的・法律的・政治的制度を享有するものとしてトマス・モア卿により描かれ

た想像上の島。どこか想像上の漠然とはるかなる地域・国・土地。」のほかにさらに、「2. 政治・法律・慣習・周囲の事情に関して理想的に完全な場所・状態・状況。特に社会的改善にとつての極端に理想的な設計。」という意義も当然ながら明示されているのである。

このように *utopia* は、その語源や O.E.D. の定義からも知られるように、*no place* として「どこにもない」想像上の土地、さらには一般に空想・夢想を意味するとともに、また *good place* として「理想郷」をも意味する語である。したがって Roger L. Emerson も述べているように、「この語の曖昧さを反映してユートピア的作品は、時にはおそらく達成可能なすばらしい社会制度の理想像であり、時には望ましいが達成不能の完璧な理想の空想的産物である<sup>(3)</sup>」ということにもなるのである。

しかし、*utopia* という語が Thomas More の造語であって、また近代欧米のユートピア思想の原型が彼の “Utopia”——詳しくは、“The Best State of A Commonwealth and The New Island of Utopia” (『国家の最善の政体とユートピアという新しい島』)——にあることには、誰しも異存のないところであろう。いったい Thomas More は、その “Utopia” において何を描こうとしたのであろうか。どういう動機や意図をもって執筆したのであろうか。はたして教養あるルネサンス・ヒューマニストの気まぐれな文学的戯文として、単に虚構の世界を想像力のほとばしるままに描いたものであろうか。それとも当時のイギリス社会の諸悪の根源を明らかにし、目ざすべき理想的国家像をひたむきに構築したものであろうか。

“Utopia” ほど多くの人々に読まれ、しかもさまざまな解釈や評価を与えられた作品は、他にそれほど多くはないといえよう。C. S. Lewis も、「“Utopia” が偉大な書物であるということでは、すべての人の意見が一致するように思われるが、その本当の意味に関しては二人として意見の一致をほとんどみないのである。我々は “Utopia” に非常に多くの矛盾対立する賛辞をとおして接近するのである。」<sup>(4)</sup>と述べている。

## “Utopia”における Thomas More の世界

以下の小論において私は、“Utopia”について従来行なわれてきた多種多様な解釈と評価を総括的に眺めて、それらを整理しながら、“Utopia”における Thomas More の世界について私なりの見解を呈示してみたいと思う。しかし今ここで、あらかじめ結論的な言いかたが許されるとすれば、私は、Thomas More の “Utopia” は、ただ単に文学的戯文でもなければ、また当時の現存社会に対する批判にもとづく社会体制の変革を鼓吹した書にすぎないものでもなく、むしろさらに理想社会——「無何有郷」(むかうのさと) という訳語を当てるのにまったくふさわしい Utopia——を実現するために必要欠くべからざる人間の変革を説いた精神的(宗教的)覚醒の書でもあるのではないかと考えるのである。

## 2 近代的視点

“Utopia”の解釈や評価の多様性については、我が国ではすでに田村秀夫氏(『イギリス・ユートピアの原型』1968年)や伊達 功氏(『近代社会思想の源流』1970年)がそれぞれ精細をきわめた卓越した論文のなかで、従来の諸説のうち主要なものを類別的に考察しておられるが、私も私なりの視点から概括的に従来の多様な解釈と評価を検討していくことにする。

何といてもまず第一に取りあげなければならない “Utopia” 論は、K. J. Kautsky の見解であろう。<sup>(5)</sup> Martin Fleisher が述べているように、Thomas More に対する関心は、彼の死後数世紀の間は衰えていたにもかかわらず、十九世紀の終わり近くになって More の人生と作品に対して幅の広い持続的な関心を復活させるようになったものは、アングロ・カトリックの知識人たちとともに、ほかならぬドイツの社会民主主義者 K. J. Kautsky だったからである。彼の “Thomas More und seine Utopie” (『トマス・モアとユートピア』1887年)こそ、Thomas More を現代にまで復活させた原動力なのである。

Kautsky は、「Marx, Engels のドイツの学徒の一人」が「唯物史観にもとづいて公けにされた最初の比較的大きい歴史研究」とであると自認する本書に

において、ロッテルダムの Erasmus が Ulrich von Hutten にあてた手紙を More 評価のきわめて重要な資料と判断し、これに依拠しながら、「悪い国家の本質が何であることを示す」ために書かれた“Utopia”の著者 More を「近代社会主義の最初の人物」とであると見なすのである。Kautsky によれば、Platon の『国家論』の影響は否定できないが、“Utopia”は More を取り巻く諸条件から引き出されたもので、近代的性格を有するものである。したがって Platon の『国家論』との類似は、外面的なものにすぎない。Thomas More は、ヒューマニストとして、政治家として、同時代者のうちの第一級の人物の一人であるが、社会主義者としては唯一無比の人物である。そしてこの「社会主義の側面こそ、More を不滅の人物にしたのである。」<sup>(6)</sup>という。

“Utopia”において More はいったいどのような目的を追求したのか、と問いつながら Kautsky は、More の共産主義は、Platon の共産主義とはまったく異質的なものであって、近代初期の社会のひどい状態と近代的経済の発達  
の萌芽を前提として生まれたものであり、したがって「More の共産主義は、Platon 的でもキリスト教的でもなく、近代的であり、資本主義の条件から生み出されたものである。」と断定するのである。“Utopia”は、「現存状態に対するきわめて痛烈な批判を内容とし、当時の経済的・技術的条件に対応した考えられるかぎり深く考えられた共産主義の体系を示しているような著作」であるが、Kautsky によれば、More の“Utopia”に関する細かい説明の全体をとおして、ただ一つだけ夢想の要素があり、More 自身もその実現には自信がなかったのである。しかしそれは、「追求すべき目標」ではなくて、「目標を達成する方法」に関してである。More は、つれづれなるままに夢物語を書いたのではなく、当時の経済的傾向の本質を見きわめてから人々の向かうべき目標を掲げたのであるが、しかし、「ユートピア社会主義がユートピア的であるのは、目標の実現不可能によってではなく、目標達成のために使用ないし適用しようとする手段の不十分のためである。」<sup>(7)</sup>と Kautsky は主張するのである。

Kautsky のように More を近代社会主義の最初の人物と見なすわけではな

いが、少なくとも More を近代的な立場に立つ改革者と考える More 研究家には、Russell Ames がいる。“Citizen Thomas More and His Utopia” (『市民トマス・モアとユートピア』1949年)において Ames は、「“Utopia”は、天才的な個人が偶然に創作したものではなく、封建制度に対する資本主義の攻撃の所産であり、衰退しつつある社会秩序に対する中産階級的のヒューマニズムの批判の一部である。」<sup>(8)</sup>と断定し、「なるほど“Utopia”は、観念論的中世主義と初期社会主義の両観点からすればいささか反資本主義的ではあるけれど、本書の核心は共和主義的・ブルジョワ的・民主主義的であって、実業家・政治家・エラスムスの改革者としての More の経験の所産である。」<sup>(9)</sup>と論じているのである。

しかし Ames によれば、More が共產主義の理論にいかにか引きつけられたにせよ、イギリスにおける共產主義の実践的な唱道者であったことは可能であっても、ありそうもないことである。共產主義ばかりでなく宗教などについても、「More の経験した細かい出来事からはなれて抽象的に議論することは、<sup>(10)</sup>実践的な社会改革の努力としての“Utopia”の本質を曖昧にする。」と考えるのである。

Ames よりも Kautsky に近い立場に立って、More を「近代ユートピア的社会主義の父」と考える人に、Ernest Barker がある。Barker によれば、More が Platon の『国家論』からたとえどのような刺激を受けたにしても、“Utopia”は異なった独立の著作である。「時代の典型的な代表人間」である More にとって、共產主義の観念は Platon から得たかも知れないが、その動機と計画設定はまったく異なっている。すなわち、Platon の動機は経済的ではなく政治的ないしはむしろ道徳的であるのに対して、More の動機はまったく経済的なのである。両者の相違は、労働に対する態度に根ざしているのであって、Platon が労働からの自由を考えているのに対し More は労働への自由を説いているからである。要するに Barker によれば、「More はおおむね文字(形式)においては Platon 的であるが、精神においては Platon 的ではな

い。More は、Platon の共產主義の模倣者よりもむしろ近代ユートピア的社會主義の父である。」<sup>(11)</sup>

科学的共產主義こそ社會思想の最高の達成である、としてマルクス・レーニン主義の立場に立つフランツォフは、『社會思想の歴史的な道程』(1965年)(日本語訳『社會思想史概論』)のなかで、階級闘争の水準がじゅうぶんに高くないことが社會思想の未成熟としてユートピア主義にあらわれるが、しかし More の根本思想は、私有財産権の追放にあったという。ただし、「More は、急進的な見解をいづくヒューマニストであり、巨人であるが、その見解をどうすれば政治行動に適用できるかを知らないのである。」<sup>(12)</sup> フランツォフによれば、More や Campanella に筆をとらせた思想は、私的所有権が存在するかぎり社会的富が少数者の手に落ち、人民大衆を貧困にし不幸にする、という考えであった。Campanella の“Civitas solis”(『太陽の都』1623年)とともに、『More の“Utopia”は、私的所有なしの搾取なしの社會組織のよく考えられた最初の概要図である。ここに、その不朽の歴史的意義がある。』<sup>(13)</sup> フランツォフは、私的所有のない社會組織を設計した点に More の価値を見いだすのである。

我が国においても、Thomas More の“Utopia”を端的に空想的社會主義の先駆という視点からのみ眺める人に、住谷悦治氏がある。住谷氏によれば、“Utopia”の姿は More の示した架空的な理想の生活ではあるが、同時にその説くところは、イギリスの当時の法律・政治・社会・生活のいっさいの弊害の批判であり、また救済策の方向を示したものでもあった。なるほど、More の社會思想のなかには中世的なものや独断的な理想形態が見られるが、しかしそれは彼のごときすぐれた思想家でも、歴史的な制約から自由でありえなかった事実を示すものであって、「その共產主義的・社會主義的社會の構想は、古代の倫理や中世のキリスト教の天国思想の域をこえて、生産面に着目し、近代社會主義思想と相通ずる生産手段の共有という点を強調したことは、特記すべきものである。」<sup>(14)</sup>と述べておられる。

## “Utopia”における Thomas More の世界

以上において私は、Kautsky, Ames, Barker, フランツォフ、住谷氏などの“Utopia”観を眺めてきたが、これらの人々は、“Utopia”のいわば近代的な性格面を強調することにおいて軌を一にしているといえるだろう。しかし、彼らとはまったく対蹠的に“Utopia”の中世的性格を力説する人々がいる。次にこれらの人々の所論をみてみよう。

### 3 中世的視点

R. W. Chambers は、“Thomas More”（『トマス・モア』1935年）において、“Utopia”を徹底的に「その時代の書」と見なし、“Utopia”の理想は自由ではなく規律であることはまったく疑う余地がない、と主張する。「“Utopia”は決して解放的なものではない。それはむしろ不当な解放に反対する抗議なのである。」<sup>(19)</sup> Chambers によれば、“Utopia”は、新しい統治策と新しい経済状態に反対するプロテストであって、すべてが許される独裁的君主という新しい観念や、古くからの共有地農業を破壊するような「羊が人間を食い殺す」大地主の土地囲い込みに我慢がならず、時代の趨勢を慨嘆し、それに抗議した守旧の書である。

Utopia 島における諸宗教に対する一見して寛大な態度も、Chambers によれば、決して More がキリスト教よりも異教の方がよいと言おうとしたのではなく、ただキリスト教徒のなかに異教徒より悪いものがあると言おうとしたのにすぎない。つまり More は、“Utopia”を腐敗していないキリスト教徒たちの信仰にもとづいた国家として描いているのであって、修道院制度の改革をこそ期待したのである。ギリシヤ人の生活と思想を賞賛した More は、しかし、ギリシヤ的パターンにしたがって Utopia を築いたのではなく、宗教にもとづいた共同生活・筋肉労働に与えられる榮譽・知的芸術的な教養というこれらのものに基礎をおいた中世の国家を念願したのである。

Chambers と同様に H. W. Donner も、Utopia 国にパターンを与えたのはキリスト教的修道院であったという。Donner は “Introduction to Utopia”

『ユートピア序論』1945年)のなかで、Utopia 国の制度はもとより宗教や哲学もすべて理性のみにもとづいていて、「More が改革を欲したのは、共和国の憲政<sup>(16)</sup>でばなく、その精神であつた。」と説く。Utopia の制度も、その制度に吹き込まれる精神がなければきわめて不合理なものでしかありえない。More の心中には、究極的な理想の世俗的顕現として修道院がたえず存在し、人間性の改善向上を思念していた。More にとって「我々が破壊しなければならないのは、我々の制度ではなく、悪弊の根にある悪しき情熱<sup>(17)</sup>である。」“Utopia”の第1巻で More は、十六世紀初期のイギリス社会を悩ませた諸悪を分析し、その諸悪の軽減方法について示唆を与えているが、第2巻では範例により公私の道徳について教訓を教えながら、機智と巧妙さをもって人々を喜ばせようと意図した道徳的寓話を語っているのである。

「“Utopia”は、人間社会の諸問題の究極的な解決を企てているのではなく、——不可能事を企てるには More は余りにも賢明であつたから、——我々のすべてに向けられた拒絶することの許されない次のようなアピールを含んでいるのである。すなわち、我々はそれぞれ自分自身の自我を改善し、同胞の重荷を軽減し、人類を向上させて来世に備えるように役割りを果たすべきである、<sup>(18)</sup>と。」Donner によれば、More は、物質よりも精神を、人間よりも神を、——たえざる人間性の改善向上を指示したのである。

一般に、Machiavellism は現実的で Utopianism は理想的・夢想的である、と対立的に考えられるが、「More の“Utopia”はきわめて現実的な書である。」と見なす J. Bronowski と Bruce Mazlish は、“The Western Intellectual Tradition” (『ヨーロッパの知的伝統』1960年)のなかで、More はキリスト教的信仰を深くいだいた人であり、「“Utopia”は根底において山上の垂訓に鼓舞されたものである。」<sup>(19)</sup>と主張する。彼らによれば More は、社会悪の原因を神や運命のいたづらとか原罪の刻印のなかに見ず、もっぱら人間がつくりだした社会構造のなかに見いだすのである。中世的世界が事実上崩壊に瀕していて新しい種類の経済がイギリスを征服しつつある、という More



の切迫感が、新しい経済に反対して Utopia を提唱させたのである。

「More は本質的に宗教的な人間であり、強い禁欲的性向をもっていた。」<sup>(20)</sup> ことで「More は、社会のただなかで宗教的生活をし、俗世を彼の修道院にしようと決めたのである。」<sup>(21)</sup> More は、「後方を振りかえり」中世的な理想を求めている。「Utopia とは、実は改訂増補された『聖ベネディクト修道会の宗規』にしたがう拡大された修道院にほかならない。」<sup>(22)</sup> しかし More は、単純な人間ではなかった。“Utopia”は単に中世的であったのではなく、むしろ十六世紀世界の批判にして同時に中世世界の批判でもあった。中世の階層秩序とは反対に、More の社会は平等主義的であることを看過してはならない。このように見る Bronowski=Mazlish は、しかし、More を新しい経済や新しい統治策に対する反対者として、またキリスト教的修道院の理想の保持者として、中世的な十六世紀の要素を濃厚にもつ宗教的人間と考えるのである。

我が国ににおいても、More を中世的・封建的立場に立っている代表的官僚と見る人に、斎藤美州氏がある。斎藤氏によれば、“Utopia”における共産主義思想は、ギリシアの古典や新約聖書などの長い伝統をもった思想的背景に More の創作上の思いつきが付け加ったものであるが、一つの共産主義思想を More が具現するにいたった直接の動機は、当時のイギリスにおける経済的個人主義の津波に対する反発と、国家主義の風潮に乗った侵略戦争に対する反発とである。経済的個人主義が自己を正当化する思想をまさに生み出そうとする時代であって、いったい More がいかなる立場に自己をおいていたか。“Utopia”の共産主義も、「封建的社会主義」の一つであつた。というのは、近代精神はおよそ社会主義とは反対の方向に向かつて動いていたからである。

家長制家族を単位として組織された Utopia 人の社会は、その政治的平等にもかわらず、一種の修道院的気づまりを感じさせることの方がはるかに注目に値する。——こう考えられる斎藤氏にとって、「最善の共栄国家 Utopia」というのは、中世精神の延長上に咲いた青い花であつた。」<sup>(23)</sup> More のエリート意識は、タテには隷属的でヨコには共同的であつた中世社会の生活形態から派生

した意識であり、「More の思想は、いっさいの個人主義思想と対立するものである。」<sup>(24)</sup>

斎藤氏と同様に More の保守的態度を主張する人に、水田洋氏がある。水田氏によれば、イギリス革命の百年あまりまえに書かれた“Utopia”には、封建社会の崩壊と資本主義の興隆とにもとづいておこった社会的混乱に対して、More が財産の共有にもとづく貨幣のない社会を Utopia として描き出しているが、しかし Utopia には奴隷制もあれば強固な宗教的・政治的統制もあって、全体としてはむしろ保守的である。「More の鋭い現実批判と、社会そのものの変化についての感覚とは、近代社会思想史の初期をかざるもの」<sup>(25)</sup>ではあっても、水田氏によれば、「もともと Utopia 思想が生じるのは、現実に対する不満や批判があって、その解決の方向を現実のなかにみつけることができない場合であるが、それは、その思想家が現実の歴史の段階よりおくれすぎてもすすみすぎても、ありうることである。More の場合は、むしろおくれすぎた例であろう。」<sup>(26)</sup>と言われる。明らかに水田氏にとっては、More は保守的な人物なのである。

#### 4 その他の視点

以上において私は、さまざまな“Utopia”の解釈と評価のなかで、その近代的な性格と中世的な性格とをそれぞれ強調ないし力説する見解を眺めてきたが、そのほかにも多種多様な見方が行なわれているのである。

まず「第三の視点」に立つと自称する J. H. Hexter の見解を考察してみよう。「左翼の学者たちは、More の時代を特定の二十世紀の視点から眺めることによって、また右翼の人々は、More の時代を彼らが好んで中世的な視点だと考えたがるところから眺めることによって、それぞれ More の意見と時代とから、実際は両者がもっている内的結合の尺度を奪っているのである。」<sup>(27)</sup>と主張する Hexter は、“More's Utopia”（『モアのユートピア』1952年）において、第三の視点としての彼の見解を次のように述べている。

「“Utopia”の談話篇(第2巻)は、政治家の眼と心・広い世間的な経験・異常な感受性の良心を無比に賦与されたキリスト教的ヒューマニストの所産であり、このヒューマニストは罪、とりわけ傲慢の罪をば社会の癌とみたのである。」<sup>(29)</sup>

Hexter によれば、More にとって悪の帝国を支配する三頭は、怠惰・貪欲・傍慢であって、“Utopia”の第2巻である談話篇は、More が十六世紀におけるキリスト教諸国の諸悪の診断にもとづき、諸悪の根源が罪、主として傲慢にあって、人間の魂がこの罪に感染したことから治療されることを命じるものである、と考えるのである。そして、「More の十六世紀の社会の分析が、傲慢こそ諸悪の大部分の根源である、という結論に More を導いたことを我々がいったん認めれば、Utopia 社会のパターンは明瞭で首尾一貫した理解できるものとなるのである。Utopia 国は、その基本的構造において、傲慢を征服するための一大社会的方便なのである。」<sup>(30)</sup>

したがって Hexter にとっては、「Utopia の経済制度であると思われるもの——財産の共有、市場や貨幣の廃止——が経済的であるのは、形式においてであって、目的においてではない。経済制度の厳密に経済的な機能は、付带的である。More の眼からすれば、それらの経済制度は、経済的な目的に仕えるのではなく、他のもっと高い目的に仕えるのである。」<sup>(31)</sup>ということになる。More のパシビズムは、More のキリスト教的信仰の核心であったから、根絶できるものではなかった。諸悪の根源は、社会の経済組織を単に組みかえることによって破壊するには余りにも人々に深く入り込んでいることを More は確実に知っていたし、また信心深いキリスト教的人間として知らねばならなかったのである。「傲慢の訓練が、国家の最善の政体の基礎である。そして、それ以上に現実の王国をこの最善の政体へ到達させるのを妨げるものこそ、傍慢そのものなのである。」<sup>(32)</sup>

Hexter の見解が「第三の視点」になるかどうかはともかくとして、まことに肯綮にあたいるきわめて示唆的な解釈であるといえるだろう。しかし、これについては後に再び言及することがあるだろう。

次に、<sup>(81)</sup> 視点をかえて、ヒューマニストとしての More に焦点を合わせた見解をみていくと、<sup>(82)</sup> 浜林正夫氏は、現実の政治に対して More はむしろ保守主義的であり、ルターの宗教改革にも敵対した。<sup>(83)</sup> カトリック教会の權威の確立を急務だと考えた More は、<sup>(84)</sup> 私有財産制そのものに問題の根源があることを見ぬき、<sup>(85)</sup> 私有財産制のない Utopia を考案したが、<sup>(86)</sup> 家父長制や奴隷、戦争などの主張をとおしてヒューマニズムの限界が見られるのである。「カトリック教会とそれが代表する封建社会とのきびしい対決」を回避しながら、「しかもヒューマニズムのゆえに私有財産制の廃棄というはるか先の課題をみぬいた」<sup>(87)</sup> ところに、More の偉大さと同時に悲劇があった。<sup>(88)</sup> 浜林氏は、悲劇の人物として More をこのようにみるのである。<sup>(89)</sup>

「“Utopia”を貫く基本思想は、ヒューマニズムの合理性であった。」<sup>(90)</sup> とする原田綱氏は、Utopia 島における奴隷階級の存在の肯定はヒューマニズムの限界を示すけれども、「“Utopia”には近代初頭におけるイギリス支配階級に対する痛烈な皮肉と、他方ではエンタロージャメント・ムーヴメントの結果として土地を追われた貧困な農民や手工業者に対する暖かいヒューマニズムとが満ちていて、<sup>(91)</sup> しかも More 自身は、自分の信念を操守したために Henry 8 世から叛逆罪に問われて絞首台にのぼった。<sup>(92)</sup> 「More は、貴族的な当時の支配機構のなかで顯官の地位にありながら、庶民的な精神を失うことなく、惨忍な極刑の犠牲となった」<sup>(93)</sup> ヒューマニストであった、と述べておられる。<sup>(94)</sup>

また「Utopia」の翻訳者の一人平井正穂氏は、More は「文芸復興と宗教改革の二つの思潮が中世的な思潮と激突した恐ろしい時代」である「過渡期の人間」、「危機に立った人間」として、「できるだけ非現実化した現実暴露」を「客観的な事実の鋭粛な批判を空想化し滑稽化」することによって、「“Utopia”に結実させたのである、と述べて、「“Utopia”は、「近代的精神のマニフェスト」にして「中世的な絶対主義からみずからを解放しようとする近代人の自由の宣言」であると考えられる。「虚構と事実とのがらみあった、そしてまた諧謔と怒りのもつれあったロマンス」である。「“Utopia”を書いた More が法廷に立

つ姿は、「嵐に抗して立つヒューマニストの姿」であるが、そこにヒューマニズムの持つ力強さとともにその限界を平井氏は見いだしておられる。<sup>(89)</sup>

さらに視点を転じて“Utopia”を制度的背景やイギリス商業資本との関係に観点を置いて眺めていく人に、田村秀夫氏がある。田村氏は、G. Winstanley の“The Law of Freedom”（『自由の法』1652年）が民衆の「内から」形成された utopia であり、体制の「下から」作られた理想社会であるのに対比して、More の“Utopia”は民衆の「外から」構想された utopia であり、体制の「上から」与えられた理想社会である、と考える。田村氏によれば、イギリスの社会が中世から近代へと大きな転換を開始しはじめた時期に生きた More は、「その経歴と個性から修道院の厳格さと世俗の生活とを結合する方法」を探求して、その理想を Utopia 人の生活のなかに具体化したのである。したがって、“Utopia”には近代的な面とともに中世的な面が同時に含まれているが、Utopia 社会の制度的背景は、イギリスの都市と、それを基礎とする国民国家への発展である。すなわち、ギルドを中核とするイギリス自由都市の発展と国民国家の形成において、それを代表するロンドン商人の社会意識とイギリス商業資本の歴史的 성격が、Utopia 社会に反映しているのである。More と関係の深い当時のロンドン商人の国民意識やエリート意識が、Utopia 人のエリート意識となって現われ、強力な王権の支持のもとに世界市場を開拓しつつあった当時のイギリス商業資本の性格が、一見すれば封鎖的孤立的に思われる Utopia 国を開かれた社会とし近代的な国民国家的なものにした。しかし、商業資本が絶対王政と結合して独占の特権を得ることによって旧秩序に寄生するという前期的資本としての保守的な性格が、カトリシズムとの妥協を生みだし、それが Utopia 社会へキリスト教を導入させることになるのである。<sup>(90)</sup>田村氏によれば、このようにして、イギリス商業資本の前期的資本としてもつ自己矛盾を内包した過渡的な二重性に着目して、これを Utopia 社会に対応させれば、“Utopia”についての従来の諸解釈が成立した根拠を把握することができるのである。More の“Utopia”は、イギリス商業資本の歴史的な性

格を反映するものとして、いわば『外から』＝『上から』の Utopia の原型と<sup>(87)</sup>考えられる。』——これが田村氏の結論である。

## 5 対話の視点

以上において私は、“Utopia”とその著者 More についての多様な解釈や評価のうち主要と考えられるものを眺めてきたが、いったいこのような多様性はどのように生じたのであろうか。

「Thomas More の “Utopia” は、偉大な冗談のうちに語られた貴重な真実<sup>(88)</sup>である。あるいはまた、貴重な真実を内包するところの偉大なる冗談である。」という評価をもって “Utopia” の分析の結語とする伊達功氏は、“Utopia” を発表された時期と内容からみて「近代社会思想の源流」と呼ぶとともに、他方において、“Utopia” の単純な解釈や評価を困難にしている諸条件として、More の時代の過渡期的特殊性、“Utopia” の目的・構造の二重性、More の経歴と個人的性格のからみあい、さらにカトリックの影響などを指摘しておられる。

今まで概観してきた多様な解釈や評価は、実際、伊達氏の指摘されるこれらの諸条件を無視しないまでも軽視して、それぞれの好みの視点に立脚し、いわば我田引水式に過度の単純化を行なった結果として得られた見解であるといえるだろう。

しかし、さらに、単純な解釈や評価を許さない重要な条件として、“Utopia” のジャンルがある。いうまでもないことであるが、“Utopia” は「対話」を<sup>(89)</sup>基本的なジャンルにしている。David M. Bevington が述べているように、Thomas More の名前は、急進的な社会主義諸国の世界を擁護するためにも反共産主義的な教皇制の立場を支持するためにも、ともに尊敬の念をもって援用されてきたが、この対立的な解釈を可能にする “Utopia” の自称批判的な読解も、それぞれの立脚している歴史的な視座のほかに、実は文学的な理由として「対話」というジャンルに起因して対立を許すことになるのである。

すなわち、Bevington によれば、対話者の一人である Hythloday と登場人物 More とは、作者である More 自身の心の二面の両極端を代現しているのであって、More 自身の裁判官としての人生行路の有名な公平無私さが、法廷における裁判と同様に、“Utopia”においても均衡のとれた二面的な対話を可能にしたのである。作品のなかの論争的な対話においても討論の対話においても、作者 More は、「両者側の意見の呈示を超然とはなれて公平に眺めた」<sup>(40)</sup>のである。したがって、“Utopia”を批判的に読んだ結論であると主張する人々が、対話者のうちの一人の人物の意見を取りあげて、それが作者 More の意見であるかのように見なすことは、極端な偏向を生むことになるのは当然であろう。“Utopia”について多様な解釈や評価のなかでも、対立的な見解を生じさせるのは、特にこの「対話」形式の無視に原因があるといわなければならないのである。

ところで、“Utopia”のジャンルである「対話」に着目して、独自の見解を述べている人に、Edward Surtz がある。Surtz によれば、対話こそ “Utopia”<sup>(41)</sup>のシンボルであって、「対話は、広い心・謙虚・探求を象徴する。」Platon の対話が弁証法的であるのに対して More の対話は物語的であり、物語的枠組における対話中の対話という複雑な形式がしばしば採用されているが、それは問題の複雑さの反映であるけれど、More は Hythloday の説明に焦点を合わせることによって単純化をなしとげている。しかし、「Hythloday は More の本のなかでの唯一人のユートピア的理想主義者である。」そして、Hythloday に立ち向かう反ユートピアン（ディストーピアン）たちは、君主、<sup>(42)</sup>廷臣や議員、弁護士、More 自身、Peter Giles である。したがって、たとえば、Hythloday だけの意見を “Utopia” の解釈や評価の根拠にすることは当を得ていないことになるのである。

「“Utopia”は、終わりのない作品——あるいは、不定の結末をもった対話である。More は、決してじゅうぶんに答えることのできない正しい問題を問うている。More は、決して完全に解決できない正しい課題を提出している。文

と武をもって正義と平等のために行なう戦いは、悪徳と愚行、貪欲と無知、傲慢と偏見が人間の心と精神に影響を及ぼしたり、それを占有したりする<sup>(43)</sup>かぎり、決して終わることはない。」

Surtz によれば、「More はみずからに Thomas を疑う役割りを与えている最初のディストピア的文筆家である。」<sup>(44)</sup> Utopia は閉ざされた固定された制度や永遠的な完璧の制度を現わしているのではなく、理論においても意図においても終わりのないものである。Utopia 的絶対は、うすいヴェールをおおったキリスト教的価値であって、“Utopia”において「反ユートピアの機能は、政治的・社会的・経済的要因だけでは Utopia を創造するには不じゅうぶんであることを明らかにすることであつた。」<sup>(45)</sup>これこそ、More が主張したかったことにほかならない、と Surtz は論じるのである。

“Utopia”の解釈や評価の多様性についての原因は、以上で明らかなように、More と “Utopia”にまつわる歴史的・社会的・個人的諸条件を無視ないし軽視して、ある一つの視点から単純化を過度におしすすめたり、ジャンルとしての対話に着目しなかったりしたことにあるといえよう。したがって “Utopia”についての適切な解釈と評価は、逆にいって、“Utopia”の書かれた諸条件を網羅的に考察し、対話の人物の意見を公平に検討することによってはじめて可能になると考えられるのである。

ところで、今まで概観してきた従来の諸見解は、Kautsky, Ames, Barker, フランツォフ、住谷氏のように “Utopia”の近代的な側面を強調するもの、Chambers, Donner, Bronowski=Mazlish、斎藤氏、水田氏のように中世的な性格を力説するもの、Hexter、浜林氏、原田氏、平井氏のように人間性やヒューマニズムに着目するもの、田村氏のように経済史的な観点から眺めるもの、さらには Bevington, Surtz のように「対話」的視点から考察するもの、など実に多種多様であつた。

これらの解釈や評価は、おそらく、“Utopia”で More が描こうとした世界について、部分的な真理を告げているには相違ないと思われる。しかし私は、



## “Utopia”における Thomas More の世界

歴史的な視座とともに対話のジャンルからもみた場合、従来の諸説の多くがひとしく前提にしているように、“Utopia”がただ単に当時のイギリス社会の現状批判を行ない、Hythloday の談話形式で理想社会の見取図を描いた政治小説にすぎないものであるとは考えられないのである。それは、Thomas More が、中世と近代の過渡期の人間であり、大法官になった代表的官僚にして宗教的・禁欲的なヒューマニストであり、心臓は熱烈なカトリック教徒として回顧的・復古的思想の持ち主にしても頭脳は古代ギリシアの学問を学んだ進歩的・合理的なルネサンス・ヒューマニストであったからである。歴史的境位からも個人的経歴や個性からも、More は決して単純な人間ではありえなかった。むしろ古いものと新しいものとの内面における葛藤相剋、さらには人間性そのものの矛盾についての洞察にこそ、More の生涯における悲劇の源泉があり、思想構造の根本があったにちがいないと考えられるのである。

したがって、たとえば、M. L. Berneri が “Journey Through Utopia” (『ユートピア思想史』1950年) でいうように、「それ(=“Utopia”)は、逃避者の夢想であり、同時に彼がそのもとで生活した制度と政府とを風刺するための手段であった。<sup>(46)</sup>」しかし、「我々は、More が考えだした法体系や制度よりも、むしろ当時の社会に対する彼の告発のゆえに More を賞賛したい。」とか、Gerhard Ritter が “Utopia and Power Politics” (『ユートピアと権力政治』1952年) でいうように、「陽気な風刺として始められたものが、イギリス社会と国家との厳しい絶望的でさえある告発で終わった。<sup>(48)</sup>」とか、More の当時のイギリス社会に対する風刺と告発の視点のみから “Utopia” を眺めるだけでは、“Utopia”における More の世界を見る視点として、いささか弱いといわなければならない。もっと More の内面的世界を照射した見方がなされなければならないのである。

## 6 内面的葛藤の視点

More の内面的葛藤に視点をおいて考察したものとして私は、Robbins

Johnson の “More’s Utopia : Ideal and Illusion” (『モアのユートピア：理想と幻想』1969年) に注目したい。Johnson によれば、「Thomas More の “Utopia” は、一人の人間が公的な領域と私的な領域との葛藤を調和させるために行なった方法についての議論なのである。」<sup>(49)</sup> そして、「“Utopia” において Thomas More は、ユートピア的神話の価値は、それが秘める目的にあるのではなく、それが明らかにする手段——人々が現実の世界に幻想的な希望よりもむしろ真実の理想を導入しうる手段——にある、と主張する。」<sup>(50)</sup> したがって Johnson にとって Thomas More は、社会の完璧な像を呈示するよりもむしろユートピア的神話の理想と幻想に立ち向かう妥当な姿勢を明らかにしようとするものである。

「“Utopia” の不朽の像は、共和国の完璧な政体の像ではない。むしろ人生をしばしば圧倒する諸現実のまえて、そしてまた心の束の間の幻影のまえて、みずからを維持しようとして戦う人間精神の反映である。」<sup>(51)</sup>

「世俗に超然としながら掛かり合いをもつ」(involvement within detachment)<sup>(52)</sup> あるいは「世俗的に掛かり合いながら超然とする」(detachment in involvement)<sup>(53)</sup> More にとって、世俗に超然とした急進的な哲学的観念論者 Hythloday の強制的な制度主義と私欲的理想主義は安易に受け容れることができないのである。ユートピアの観念は現実突き当たる諸要求に適合されるときにはじめて人生におけるその真実の位置を見いだせる、と考える More にとっては、utopia への旅行には哲学者ではなく詩人を同伴して、再び人生へ帰ることがあってこそ意味なのである。

理論的で合理的な計画者である Hythloday には、実務家にして政治的な人間である Morton や仲介的詩人の役を果たす登場人物としての More などが、対話の相手として必要不可欠の存在なのである。Hythloday のような理想主義者は、「諸悪の根源が人間本性の堕落によりもむしろ所有の体制にある、と考えることで誤る」<sup>(54)</sup> のである。Hythloday の徹底的に合理的な理想主義に対して行なう More の反対は、“Utopia” の読者をして社会の経済的基礎を越え

## “Utopia”における Thomas More の世界

て人間本性に横たわる源泉へと押し動かすのである。「人間がすべての社会的墮落を始めるのである。人間の邪悪さが、たとえいかなる組織的な原理でも搾取的・衰退的な制度にかえるのである。」<sup>(59)</sup>したがって More が utopia 的制度で求めなければならないものは、完成された社会ではなく、現実の世界において人間性をおそって人を墮落させる諸影響と戦うための手段なのである。

Johnson によれば、したがって、「More にどって理想は、ただ心の中<sup>(60)</sup>の場所であって、物理的に旅行できる場所ではないのである。」理想を心に描くためには、哲学者・予言者が必要であるが、しかし人間が理想を選ぶのであって、理想が人間を選ぶのではないことを見きわめるためには、「自己訓練した心<sup>(61)</sup>の自覚」が必要である。Hythloday は、Utopia の向けられる目的と、その目的を達成するために Utopia 人によって用いられねばならない手段とを識別する能力を失ってしまっている。「各個人の良心の意識こそ、何らかの幻想<sup>(62)</sup>や欺瞞から解放された理想に向かって人間を運ぶ唯一の媒体なのである。」Hythloday のユートピア主義は、現在の現実と理想のために望まれたものとを仲介する挑戦を彼が取りあげることを拒否するから、二十世紀のディストピアにいたるのである。

「ユートピア的神話が有用であるのは、人が目的に接近する手段<sup>(63)</sup>についてあって、その目的そのものを明確にする努力であってはならない。」Johnson にどって真実のユートピア的理想主義の源泉とは、偶像破壊主義の Hythloday が賞賛しようとする像にではなく、その像の形を生み出す精神、その像を生き返らせ実存の内容を与える手段にある。したがって「究極的に More のユートピア的神話は、人生が向けられるべき目的についてではなく、神と人間本性によって予め決定されている目的を達成するために人が用いるべき手段<sup>(64)</sup>についてのものである。」

「Utopia は、一つの場所ではなく、無何有郷 (Nowhere) である。それは心<sup>(65)</sup>のなかの一点であって、歴史上の一時代ではない。」“Utopia”の第1巻の終わりで行なわれている財産共有に対する More の反対は、社会的墮落が、人間が

制度を用いる方法に反映されるけれど、もともと人間性に固有の邪悪さから始まるのであるから、改革の真の焦点が何であることを明確にするのに役立つのである。だから「制度的強制によって強化された Hythloday の共産主義は、ただ墮落のあらわれたものを消去するだけであって、人間の邪悪さの源泉を取り除くものではないのである。」<sup>(62)</sup>

このように “Utopia” の精神を考える Johnson にとって、「真の共有（共同社会）は、制度的ではなく精神的である。」<sup>(63)</sup> したがって「More のユートピア的理想は、目的から手段へ、制度から個人へ、そして最後には人間同胞の個人的な良心の意識へ、とすすんでいく。」<sup>(64)</sup> だから、「More の理想は、ほんとうは、社会の内部にある各個人にとっての理想なのである。」人間は自己の人生を自己自身の意識によって統制し、自己の価値を移ろいやすい世界の物質的徴候よりもむしろ自己自身の意識のなかに見いだすときにはじめて、真に自由で安全でありうるのである。「良心の意識の自己訓練こそ、真の交わりを妨げる内面的な墮落（傲慢）から人を自由にするのである。」<sup>(65)</sup>

More の良心の意識の理想と、Hythloday の欺瞞的・自己破壊的理想主義との対照が、Johnson によれば、“Utopia” のモチーフであり、「Utopia は、制度をとおしてではなく、キリスト教的ヒューマニストたちのような人々をとおして、ヨーロッパへ移されるのである。」<sup>(67)</sup> かくて Johnson によれば、「ユートピア的神話は、それが描く目的において重要であるのではなく、（それが示す）人間が現実の世界と理想の世界とを仲介する手段において重要なのである。」<sup>(68)</sup>

## 7 おわりとして

以上のような Johnson の “Utopia” 観は、近代的にしる中世的にしる歴史的視座のみに立って “Utopia” を解釈し評価しようとするものからみれば、まったく歴史的観点を無視した非歴史的見解にみえるであろうし、“Utopia” すなわち理想的社会像の描写と考えるものにとっては、まったく見当ちがいの謬見に思われるであろう。しかし、従来行なわれてきた “Utopia” についての

## “Utopia”における Thomas More の世界

多様な解釈と評価の原因・理由を考え、また More のおかれた歴史的境位や社会的・個人的状況に起因する彼の内面的葛藤を想像するときには、決して途方もない不条理な見方とはいえないであろう。むしろ“Utopia”が時代を越えて読まれ、人々に感激を与えつづけてきているのは、“Utopia”が単に人々を現実から逃避させて空想的な理想世界に耽溺させるからではなく、“Utopia”が現実には「どこにもない」が、しかし「どこかになければならない」ものとして、しかもそれが我々の人間性——単に社会の体制ではなく——に直接かかわるものとして、いわば人間性に対する告発を行なっているからではなかろうか。すでに言及したように、Hexter が「第三の視点」として、社会的諸悪の根源は罪、とりわけ傲慢の罪にあって、この傲慢を征服するための一大社会的方便が utopia 社会である、と述べているのは、Johnson が「良心の意識の自己訓練」による傲慢からの解脱こそユートピア的神話の価値である、と論じているのと、まったく軌を一にすといえよう。

もし我々が現実を超然としている理想主義者 Hythloday の語ってきかせる Utopia 島の制度や生活にのみ眼を向けて、理想的国家像の描写が“Utopia”のすべてであると考えた場合には、たとえば Bertrand Russell が“History of Western Philosophy”（『西洋哲学史』1946年）のなかで、More の“Utopia”は多くの点でおどろくほど自由主義的であるが、しかし「More の描く Utopia における生活が、他の人々の考えた大部分の理想郷におけるのと同じように、<sup>(69)</sup>耐えがたいまでに退屈なものになるであろうことは認めなければならない。」と述べているのも当然であると首肯できるだろう。Russell にとっては、幸福には多様性ということが肝要であり、Utopia 国には、その多様性がほとんどみられないからである。「空想上のものであれ、現実のものであれ、すべて計画された社会組織には、これが一つの欠陥となる。」<sup>(70)</sup>と論じるリベラリスト Russell は More の“Utopia”には否定的な態度をとらざるをえないのである。

また J. D. Mackie も“The Earlier Tudors, 1485~1558”（『初期チューダー王朝』1952年）で、More の外見上の合理性にもかかわらず、彼の理想国家は

高度に人為的であった、と述べている。「More の理想国家は、彼の自由主義<sup>(71)</sup>にもかかわらず、実はその人民が自由ではない統制された国家であった。」そして、More の計画された国家は、世界平和にとって危険であった。それは、Hitler のドイツに奇妙なほど似ていた、とさえいって、「普通の人にとって Utopia<sup>(72)</sup>での生活は、耐えられないほど退屈だったにちがいない。」と Mackie は論じるのである。

さらに、E. E. Reynolds も、“Saint Thomas More” (『聖トマス・モア』1954年) のなかで、「Utopia は、助力のない人間理性によって導かれた国家である」が、「William Morris, H. G. Wells, Platon などによって考案された想像上の共和国は、すべて過度の組織化で特色があり、生きるのにきわめて退屈な国となるだろう<sup>(73)</sup>」と述べている。

Russell, Mackie, Reynolds 三人とも、理想国家“Utopia”が人為的に計画され統制された社会制度の国家として、きわめて不自由で退屈な国であることを指摘している点ではまったく異口同音である。Hythloday の描く国家像が理想的であるとすれば、このような三人の批判的な見解が出てくるのもまったく当然であるといわなければならない。

しかし、Hythloday の理想的国家 Utopia の描写は、“Utopia”のなかの最も重要な部分ではあるにしても、“Utopia”のすべてではないのである。Hythloday に対する Morton や Peter Giles の反論的質問をはじめ、第1巻・第2巻のそれぞれ最後でなされている登場人物 More の反対意見の表明こそ、理想的国家像の呈示が必ずしも“Utopia”の全体的かつ根本的な狙いではないことを明瞭に示しているといわなければならない。

とはいえ私は、社会思想史的にみて“Utopia”が「近代社会思想の源流」であり、「近代ユートピア思想の原型」、それも「上からの(=外からの)ユートピアの原型」であり、また Thomas More が「近代ユートピア社会主義の父」にして「空想的社会主義の先駆」であったことを何も全面的に否定しようとするものではない。“Utopia”において Thomas More が、当時のイギリス社

## “Utopia”における Thomas More の世界

会を批判し、体制変革を主張しようとしている点を見逃しようとするものでもない。ただ私は、More が理想社会を実現するためには、その必要不可欠の手段として、人間の変革を何よりも優先させなければならない、と説いているように思えてならないのである。

登場人物の More ではなく Hythloday をして、作者 More は、次のように語らしめているのである。

「もしわれわれはすべての個人的利益を尊重する心か、もしくは救主キリストの権威を恐れる心か（……………）があれば、この全世界はとっくの昔に共栄国ユートピアの法律を採用していたに違いないと私は信ずる。ただそれが実現されなかったのは、そこに、あの畜生同然の女、あのすべての禍の母であり女王である傲慢夫人が立ちはだかつて妨害したことによるのだ。彼女こそは富と幸福とを測る尺度を自分の利益に求めないで他人の悲惨と不利益に求めようという女である。女王然として冷やかに嘲笑できる、境遇の悲惨な人間が一人でもないといご機嫌が悪く、女神のような気がしないと云った女なのだ。要するに、彼女は、不幸に呻吟している人間には自分の華やかな幸福を見せつけ、貧乏な人間には自分の豪華な富を誇らしげに見せつけ、その心を一層苦しめようという女なのだ。この地獄の犬はかくして人間の心の奥深くしのび入り、人生の正しい道を踏もうとするのを妨げる。胸中深くかくも巣くってしまった以上、もはやこれを取除くことは人間には不可能なことなのだ。」<sup>(74)</sup>

かくて、More にとって Utopia は、人間に傲慢の罪があるかぎり、やはり依然として no place（「無何有郷」）なのである。

### <注>

- (1) J. Max Patrick and G. R. Negley : A Definition of “Utopia,” in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA — A Collection of Critical Essays, edited by William Nelson, p. 108
- (2) Roger L. Emerson : Utopia, in Dictionary of the History of Ideas, Volume IV, p. 458

- (3) Ibid., p. 458
- (4) C. S. Lewis : A Play of Wit, in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA, p. 66
- (5) Martin Fleisher : Radical Reform and Political Persuasion in the Life and Writings of Thomas More, p. 1
- (6) K. Kautsky : Thomas More und seine Utopie. 渡辺義晴訳『トマス・モアとユートピア』p. 248
- (7) 同書 p. 381
- (8) Russell Ames : Citizen Thomas More and His Utopia, p. 6
- (9) Ibid., p. 6
- (10) Ibid., p. 13
- (11) Ernest Barker : Utopia and Plato's Republic, in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA, p. 102
- (12) フランツォフ『社会思想史概論』(石堂清倫訳) p. 44
- (13) 同書 p. 45
- (14) 住谷悦治『社会思想史』p. 59
- (15) R. W. Chambers : Thomas More, "The Rational Heathen," in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA, p. 22
- (16) H. W. Donner : Introduction to Utopia, "A Moral Fable," in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA, p. 37
- (17) Ibid., p. 38
- (18) Ibid., p. 39
- (19) I. Bronowski and Bruce Mazlish : The Western Intellectual Tradition, p. 66
- (20) Ibid., p. 71
- (21), (22) Ibid., p. 72
- (23) 斎藤美洲『英国近代精神の胎動』p. 200
- (24) 同書 p. 216
- (25) 水田洋『社会思想小史』p. 115
- (26) 同書 p. 114
- (27) J. H. Hexter : More's Utopia, in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA, p. 62
- (28) Ibid., p. 63
- (29) Ibid., p. 64
- (30) Ibid., p. 58



“Utopia” における Thomas More の世界

- ③1 Ibid., p. 65
- ③2 浜林正夫『イギリス民主主義思想史』p. 61
- ③3 原田綱『西洋政治思想史』p. 226
- ③4 同書 p. 229
- ③5 平井正穂訳『ユートピア』(岩波文庫) pp. 195~210
- ③6 田村秀夫『イギリス・ユートピアの原型』p. 14
- ③7 同書 p. 113
- ③8 伊達功『近代社会思想の源流』p. 279
- ③9 David M. Bevington : The Divided Mind, in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA, p. 76
- ④0 Ibid., p. 79
- ④1 Edward Surz : Utopia Past and Present, in St. Thomas More : UTOPIA, edited with Introduction and Notes by Edward Surtz, pp. xxv~xxvi
- ④2 Ibid., pp. xxvii~xxviii
- ④3 Ibid., p. xxvi
- ④4 Ibid., p. xxviii
- ④5 Ibid., p. xxx
- ④6 M. L. Berneri : Journey Through Utopia, p. 58
- ④7 Ibid., p. 88
- ④8 Gerhard Ritter : Utopia and Power Politics, in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA, p. 41
- ④9 Robbin S. Johnson : More's Utopia—Ideal and Illusion, p. viii
- ⑤0 Ibid., p. viii
- ⑤1 Ibid., p. ix
- ⑤2 Ibid., p. ix
- ⑤3 Ibid., p. 31 and p. 41
- ⑤4 Ibid., p. 63
- ⑤5 Ibid., p. 65
- ⑤6, ⑤7 Ibid., p. 68
- ⑤8 Ibid., p. 103
- ⑤9 Ibid., p. 117
- ⑥0 Ibid., p. 134
- ⑥1 Ibid., p. 135
- ⑥2 Ibid., p. 140
- ⑥3 Ibid., p. 141

64, 65 Ibid., p. 143

66 Ibid., p. 145

67 Ibid., p. 147

68 Ibid., p. 148

69 Bertrand Russell : History of Western Philosophy, p. 508

70 Ibid., p. 508

71, 72 J. D. Mackie : The Planner and the Planned-For, in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA, p. 110

73 E. E. Reynolds : Reason without Revelation, in Twentieth Century Interpretations of UTOPIA, p. 113

74 Thomas More : Utopia, edited by Edward Surtz, p. 150 平井正穂訳『ユートピア』(岩波文庫) p. 180

——1974. 12. 14 脱稿——